全退教四国地区
交流集会 in 徳島

四国総決起集会

三谷隆彦

全退教四国地区交流集会が11月8日から1泊2日徳島県で開かれました。会場は鳴門大橋や淡路島の見える海岸です。四国四県六退協52名参加しました。初日の分科会で高知高退協の橋元陽一さんがビキニ核被災国賠訴訟高松控訴審の状況を報告し、9月12日の公判は香川高退教、県退教の参加で傍聴席が満席になったお礼を述べました。また愛媛県退教からは教科書採択にあたって、学校現場の意見を無視し、教育委員会が独断で決めるとの報告がありました。神戸市立東須磨小での教員いじめは今や全国どこの学校でも起こりうるとのつぶやきがありました。不可解です。教職員組合はどうなっているのでしょうか。

全体会でも橋元陽一さんが高知県知事選野党共同推薦候補松本けんじ氏の支持を訴えていると、高知県退教の西山潤さんが突然舞台に上がり橋元さんの横で、松本候補の写真を示し応援しました。すると一気に雰囲気が盛り上がり四国総決起集会になりました。

夕食後、阿波踊りの講習がありました。他の団体も加わり総勢150人くらいいたでしょうか。右手右足を同時に出します。次は左手左足です。男は腰を落とし女は白い両手を上げ、鉦（かね）、太鼓、三味線の合奏に合わせて踊ります。歌は「踊る阿呆に見る阿呆」、掛け声は「ヤットサ」です。みんなで輪を作り楽しく踊れるようになると、客のうち男女各1名の首に花輪を掛けられ壇上で「名人宣」と書いた三角旗を渡されました。男の名人は踊りが下手ですけど鉢巻きと浴衣の尻からげが人目を惹きました。師匠が男の名人宣に質問です。「どちらから来ましたか」名人の答えは

「ヤー　とき」

全日程が終わり玄関を出ようとすると、「誰か高知県の人はいませんか。上着を置き忘れていますよ」と追っかけてきました。振り返ると私の物でした。

次回は2020年11月6～7日開催予定で高知の高岡退教協が担当になります。

橋元さんと西山さん

「学校をつくる会」の活動　これからも

副会長　田中　正

今年七月から開催されていた「高知県における知的障害特別支援学校の在り方に関する検討委員会」（略称（検討委員会））が第四回の会（十二月二日）を以て意見のまとめをしました。この「検討委員会」は、高知県の知的障害特別支援学校の児童生徒数の増加傾向による学校の狭隘化の課題や児童生徒数の増加のため増築や特別教室を普通教室に転用する等の対応をしている現状に将来を見据えた抜本的な改善、解消の方策について検討することを目的に設置されました。

これに対して養護学校設立当初の在校生の人数と入学生の将来見通しから配置された普通教室や特別教室の枠をはるかに超える入学生の増加に対応するために学校や教職員の知恵と工夫、努力で教室を仕切ってみたり、特別教室を普通教室に転用したり、調理室や体育館の使用を担任間で制限しあったりしてきましたが、このままでは「本当に学校が児童生徒たちが学び、豊かに伸びる環境と言えるのか」

「学ぶことを保障しているのか」とこの「検討委員会」に期待し、要望や意見を出して、吸い上げてもらおうと「ゆたかに学べる教育の実現をめざして高知市に小・中・高、寄宿舎のある県立の百名規模の知的特別支援学校をつくる会」（略称「つくる会」）が立ち上がりました。

声掛けは、県教組や高教組でしたが周りには保護者や保育士、学童の支援員、障害者施設の支援員、特別支援学校の教員、寄宿舎指導員、特別支援学級の教員、関心のある県民などが集まりました。また高退協のメンバーも参加しました。事務局は高教組、県教組、障害児学校部や障害者団体、高退協（野村）、「つくる会」の代表委員には保護者三名と高退協から一名（田中）が選出されました。「検討委員会」は四回ということで、答申までにできることはしようと街頭署名も含めて七千七百筆、検討委員会での「つくる会」からの意見陳述、検討委員へのアプローチ、県教育長との懇談会、親の思いを語る会、特支学級担任の会、全国の学校建設運動を学習する会、要請ハガキなど（順不同）に取り組みました。

最終回の検討委員会のまとめでは、学校を作る会の要望からは遠いのですが、①四十から五十名規模の②高知市東部周辺で③中学部高等部の④既存施設利用の知的支援学校の新校整備が出されました。

第20回「開かれた学校づくり」

全国交流集会報告

野村幸司

11月8～10日、太平洋学園高校に於いて、第20回「開かれた学校づくり」全国交流集会を開催し、200名を超える方々の参加を得ることができました。集会準備・運営に当たっては、多くのみなさんよりご支援・ご協力を頂いた事、心より感謝申し上げます。

本集会は「土佐の教育改革」真っ只中の2000年12月、高知県が独自にスタートさせた子ども・保護者・地域の学校参加システムを根付かせ発展させることを目的に、実行委員会と高知大学教育学部共催で開催した集会がスタートです。その集会が全国に受け継がれ、20回を期して再び高知に帰ってきたことは本当に嬉しいことでした。

昨年秋に20回集会の開催要請を受け、関係のみなさんと相談しながら計画を練り、4月より準備を本格化しました。

集会開催の目的は、大きくは次の2つでした。

①「土佐の教育改革」で始まった流れの到達点に関する検証。

②この20年の間に生まれた新たな流れの集約。

①に関して嬉しかったのは、2000年集会で発表頂いた「学校共和制」を掲げる奈半利中「三者会」や、丸の内高校「ドリームズ・カム・トゥルー懇話会」等の取り組みが、20年の歴史を経ながら、今も継続されていることを知った事でした。論議の中心テーマについても、当時の校則問題から、現在は授業改善についての話し合いにまで広がっていました。

「三者会」的取り組みは全国的に見れば退潮傾向にあるようですし、本県においても「開かれた学校づくり推進委員会」の「形骸化」の指摘はあります。しかし、子ども・保護者の学校参加を制度化したことの意味は決して小さくないことを確認することができたことは本当に嬉しいことでした。

②に関して感じたのは、地域と学校の連携の飛躍的前進です。

防災や地域おこしなどの地域の課題に児童・生徒たちが取り組む実践が飛躍的に広がっています。集会では、伊野商業高校のツーリズムコースや商業技術部の取り組み、太平洋学園高校の「地域防災の取り組み」、そして潮江東小学校における伝統野菜「潮江菜」に関する取り組みを報告頂きました。

逆に、地域の側の学校支援・子ども支援も大きく広がっています。集会では、土佐市青年団の学校支援、県立大学生「こどもみらい塾」、「こども食堂こうち」、森田村塾、土佐町社協の取り組み他の報告を得ました。小規模校存続の課題に関しても、下田中学校保護者や全国の注目を集めた大川村村議お二人に発表頂くことができました。

地域と学校の連携は「土佐の教育改革」の柱の1つでもあり、「地域教育推進協議会」の設置や「地域教育指導主事」の配置等がなされました。その事が20年後に立派に花開き、新たな可能性を切り開いていることを知ることができたことも嬉しい発見でした。

集会参加者のみなさんからは、教育と学校に関わる様々な立場の者が一堂に会して語り合う貴重な機会が得られたと積極的な評価をいただきました。

今日の学校を巡る閉塞状況を突破する鍵も、こうした「開かれた」論議の中にこそあるように思います。今回得られた繋がりを活かし、幅広い教育論議をどう広げていくかがこれからの課題と考えています。

集会にご協力頂いたみなさん、本当にありがとうございました。